

2020年5月17日

信仰に向かう物語

今日、わたしたちは復活節第6主日と共に「世界広報の日」をお祝いいたします。教皇フランシスコは広報の日のテーマとして、出エジプト記「あなたが子孫に語り伝える」（10・2）を選び「人生は物語」であり、わたしたちは「生きている織物の一部である」と、物語る存在である人間に焦点を当てておられます。

人生とは物語であり、生きた織物を紡ぐようであると呼びかけられるとき、わたしはイエスさまが十字架につけられた場面を思い出します。—その衣服は、はぎ取られ「縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった」（ヨハネ19・23）—と記されている箇所です。四人の兵士たちはこれを裂くことはもったいないと考え、くじ引きにしたと書き記されています。この場面については、旧約聖書の詩編22に記された「わたしの着物を分け、衣を取ろうとしてくじを引く」（22・19）というみことばが成就したことを述べていると解釈されることが多いのですが、一方で、わたしはこのはぎ取られた《一枚の織物》は、わたしたちの人生にたとえることができるのではないかと考えてきました。縦の糸は神と人とのつながり、横の糸は人と人との結びつきや出逢いを示す、つまり、一人ひとりが神と隣人との出逢いによって、ユニークで美しい一枚の織物を紡いでいることをイエスさまはいつも覚えていてくださる、と読むことができるかもしれません。

ところで、本来は一枚であるはずのわたしたちの大切な織物がほつれたり、裂け目が出来てしまうことがあるようです。このような時、わたしたちはどうすればよいのでしょうか？ 教皇さまは次のように答えています。

「わたしたちは主に、自分が生きている物語を語り、他者のことを伝え、状況を打ち明けることができます。主とともに、ほころびや裂け目を修繕しながら、いのちの織物を再び織り上げることができるのです。

皆さん、わたしたちはどんなに、そのことを必要としているでしょう。」

(<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/04/30/20698/>)

わたしたちは、これまで誰も経験したことのない新型コロナウイルス感染症の危機の中に置かれています。それでも無駄なものは何ひとつとしてない人生の1ページを日々めくっているのであり、一枚の人生という織物（物語）を紡いでいることを意識したいと思います。

日本の司教団が発表した「新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り」（2020年4月3日 <https://www.cbcj.catholic.jp/2020/04/03/20551/>）を掲載いたします。立川教会共同体の中にも、医師や看護師、ケアワーカー、医療従事者の方々がおられます。仲間を思い起こし、少しでも心が軽くなるように、深い呼吸で祈り続けましょう。

「新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り」

いつくしみ深い神よ、
新型コロナウイルスの感染拡大によって、
今、大きな困難の中にある世界を顧みてください。
病に苦しむ人に必要な医療が施され、
感染の終息に向けて取り組むすべての人、
医療従事者、病者に寄り添う人の健康が守られますように。
亡くなった人が永遠のみ国に迎え入れられ、
尽きることのない安らぎに満たされますように。
不安と混乱に直面しているすべての人に、
支援の手が差し伸べられますように。
希望の源である神よ、
わたしたちが感染拡大を防ぐための犠牲を惜しまず、
世界のすべての人と助け合って、
この危機を乗り越えることができるようお導きください。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
希望と慰めのよりどころである聖マリア、
苦難のうちにあるわたしたちのためにお祈りください。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝